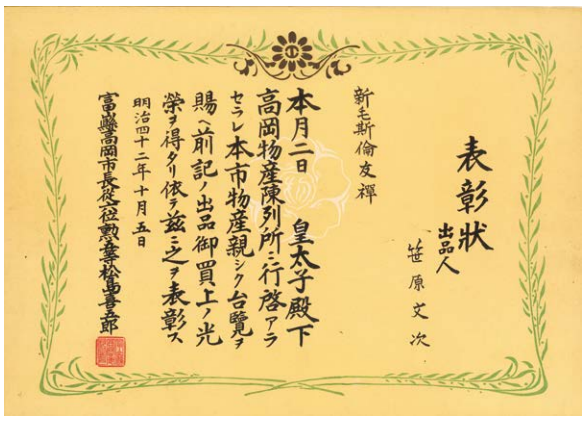
「新モス友禅」とよばれた文次の商品は、京友禅にも見劣りせず、しかも大量生産が可能なため安価でした。明治21年(1888)に実用化され、初めて市場に出荷されるとたちまち販路を伸ばし、全国的な大ヒット商品となりました。同31年には文次が中心となって「高岡染業」（資本金2万円。工員70名）が利屋町に設立されました（大正7年閉鎖）。捺染工場の多くは千保川沿いの地域に集中しており、市内でも同業者が増え、明治末までに市内で18の工場が設立されるなど、捺染産業は活況を呈していきました。

高岡の友禅工場（明治42年。高岡市蔵）

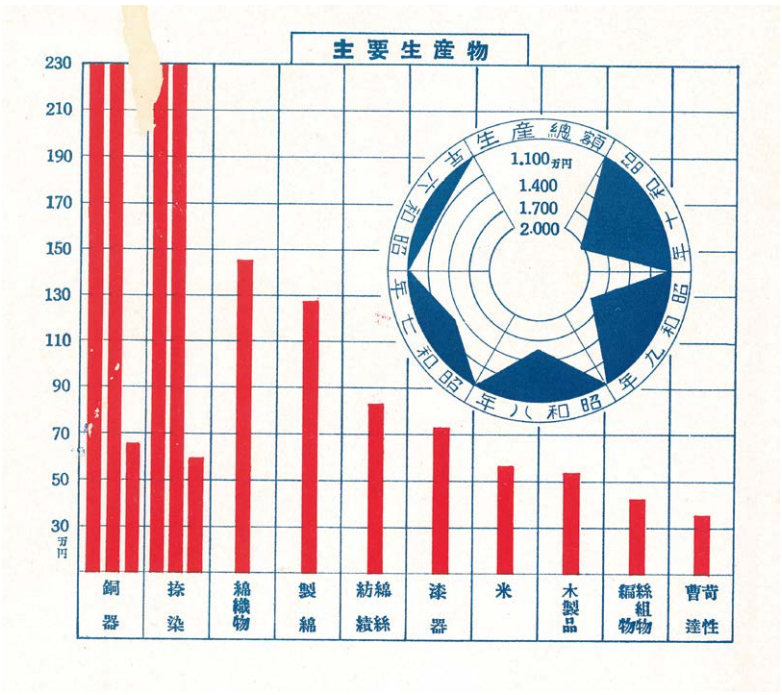


皇太子殿下新モスリン友禅御買上につき
表彰状（明治42年。当館蔵）

（3）高岡の花形産業「高岡捺染」

文次の新モス友禅の発明は各種の博覧会で受賞を重ねました。明治42年(1909)の皇太子（後の大正天皇）行啓の際には御買上げの栄に浴するなど、高岡捺染の名声を広く知らしめました。また自らの発明に改良を加え、高岡捺染に関する専売特許（5件）・実用新案登録（3件）を取得しました。そのかたわら、文次は中央から講師を招いたり、商標登録を願い出たり、染料の研究に尽くすなど、昭和2年(1927)の死去まで業界の発展指導に尽力しました（享年71）。文次の業績を示す関係資料（66件144点）は当館に所蔵されています。

その後大正6年(1917)高瀬満治らが「サロン型捺染」を考案し、初めて輸出（東南アジア）が始まり活況を呈しました。さらに昭和初期には、井上佐太郎が染色技法を革新し、洗濯に弱い文次の新モス友禅に替わり、富士絹友禅が量産されました。そして捺染産業は戦時体制の始まる前年の昭和12年(1937)まで躍進を続けました。同年には全国一位の生産額となり、銅器と並ぶ高岡の主要産業に成長しました。戦後は主に海外への輸出に力を入れながら生産が続けられましたが、やがて円高の影響を受け衰退していきました〔市内最後の捺染工場の㈱日本プリント工場は、平成13年(2001)頃に廃業〕。



高岡の昭和10年時点での「主要生産物」グラフ
〔『高岡市勢要覧』（高岡市役所、昭和11年）より〕

〔写真上〕図案制作作業〔写真下〕手捺染作業
（昭和20～30年代。於・㈱日本プリント工場。当館蔵）

2025.3.19発行